拷問禁止条約の審査で批判された

やっぱりおかしい日本の司法と死刑

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

５月22日、ジュネーブで行われていた国連の拷問禁止条約に基づく日本審査の席上で、出席者から浴びせられた批判と失笑に、日本政府代表として派遣された上田秀明人権人道大使が「何がおかしい？ 黙れ！ シャラップ！」と怒鳴りつけたため、会場が凍り付いたということが話題になっています。

「シャラップ！」は英語として品のない、公式の場で使ってはならない言葉だということですが、いったいどうしてそんな言葉が出てきたのでしょう。

★☆★

この日本審査を、布川事件で無期懲役となり、仮釈放後に冤罪をはらした桜井昌司さんも見守っていました。日本の刑事裁判では「人質司法」（犯行を認めない限り身柄を拘束し続ける取り調べ）によって有罪率が99%になっているという実情が強くアピールされ、そんな高い有罪率は、とても信じられない、と、モーリシャスの委員から「日本の司法は自白偏重の中世の暗黒裁判のようではないか」と疑問が出されました。

それに対して上田大使が「日本は人権先進国だ」と反論したところで笑い声が起こり、問題の「シャラップ！」発言になったのです。

★☆★

ところで、この日本審査では死刑の状況についても多くの懸念が示され、様々な勧告がなされています。

死刑確定者とその家族に執行の予定日時について事前通知すること、死刑確定者の処遇を独居拘禁に限らないこと、一審で死刑判決が出された場合は必ず高裁や最高裁でも審理するようにすること、死刑確定者に精神疾患がないか検討すること、などです。

そして、何よりも、初めて「死刑を廃止する可能性を検討すること」という勧告がなされたことが注目されます。

★☆★

「シャラップ！」発言のあとも、この人権人道大使は「我々は日本の人権状況に誇りを持っている……」と話し続けるのですが、列席した各国の委員はもう笑うこともありません。日本の人権状況は「笑われる」以上に「恐怖」されたのではないでしょうか。